

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。



旧年中は護持運営にご協力いただき誠に有難うございました。一年を表す漢字に、オリンピックや山中教授のノーベル賞などの理由により「金」が選ばれましたが、輝かしい一年とは言いかったように思います。

「金」という語を考えますと、『正信偈』に「行者正受金剛心」とあります。金剛とは堅固で破壊されないということで、「金剛心」とは私たちを間違いなく救い取る阿弥陀仏の本願の心、それを正受した人々の信心も砕けることはありません。

お念仏を称え、何があっても揺るがない安心「金剛心」を持って一年を過ごしたいものです。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

南無阿弥陀仏



仏の願いはそのまま 私の願いはわがまま

(帰雲真智)

本年の柱掛け法語です。その心について考えてみたいと思います。詩人、相田みつを氏の文章に次のようなものがあります。

願(がん)を持ちましょう

「願」と「欲望」とは根本的に違います。

わずかなお賽銭を挙げて、それも年一回の初詣の時ぐらいで、「家内安全。商売繁盛。お金がいっぱいできますように！」なんてね。こういうのは個人的・私的な欲望です。

それをわたしは否定しません。わたしも同じですから。しかし、そういう私中心の欲望とは全く別に、

○核戦争など絶対に起こりませんように！

○世の中がどうか平和でありますように！

○山や海や河、そして土、水、空気、自然が、

人間の作る公害で、これ以上汚れませんように！

と、心から念じたとき、それを「願」といいます。

どんな小さな「願」でも心ひそかに持ちつづけていると、顔がよくなり、眼の色が深く澄んできます。

ひとりひとり自分に合った「願」を持ちましょう。そして「一隅を照らす」人間になりたいものです。

(トイレ用日めくり『ひとりしずか』)



願

親鸞聖人は

「凡夫というのは、わたしどもの身には無明煩惱（むみょうぼんのう）が満ちみちており、欲望も多く、怒りや腹立ちやそねみやねたみの心ばかりが絶え間なく起り、まさに命が終わろうとするそのときまで、止まることもなく、消えることもなく、絶えることもない」（『一念多念文意』）

とおっしゃいます。よくよく考えてみれば、私たちの持つ願いは、自分勝手な利益しか考えない貪欲という煩惱に根ざしていて、その「わがまま」ゆえに、他者の気持ちに目を向けることができなくなり、また自分を支えているご恩や恵みも見えなくなると、結局は自他のいのちを見失い、迷いや苦悩から抜け出すことができず、むしろ、その「わがまま」な自己に気づき、それをいかに克服するかという人間の根本的な問題を解決しようとする願いこそ、私たちに真の幸せをもたらす願いといえるでしょう。

阿弥陀仏の本願とは、このようにわがままな心によって自他のいのちを見失い無明の闇をさまよい続けている私たちを、何ら条件をつけずに「そのまま」救い取る、真実の世界へ導こうとされる願いです。

親鸞聖人は、本願の成就について

「本願のはたらきがいつわりでなく変らないのは、因位の法蔵菩

薩の四十八願と、果位の阿弥陀仏の自由自在で不可思議な力にもとづくのである。願は力を成り立たせ、力は願にもとづいている。願は無駄に終ることはなく、力は目的なく空転することがない。果位の力と因位の願とが合致して、少しも食い違いがないから成就するのである」（『教行信証』〈天親菩薩』浄土論註』引用）と、教えられます。

「力」は「はたらき」、「願」が「力」に意味と方向性をあたえ、「力」が「願」成就に具体性を与えます。願か力のいずれかが欠けるとどちらもだめになります。願に裏付けられていない力はただむやみに動き回っているだけです。力を伴わない願は理念だけで具体性が欠如してしまいます。阿弥陀仏の願いが力を成り立たせているところには誓いがあります。「すべての人々」を浄土へ救い取るという願いを持ち、「もし（すべての人々が）浄土へ生まれることができないうなら、けっして覚りをひらきません」という誓いを立てられた、それが「願」に大きな「力」を与えたことでしょう。

「自然が人間の作る公害でこれ以上汚れませんように」という願いを持つとして、その裏に「できるかぎり有害物質を排出しない生活をする」というような誓いがあったこそ、力が伴ってくるのではないのでしょうか。

「願」を持ち「誓」を立てて成就された阿弥陀仏、私たちも同じようにできれば良いのですが、なかなかできるものではありません。相田みつを氏の表現を借りると、

「私達凡人は、とてもそんな人にはなれませんが、そういう人をあこがれることはできますね。あこがれるということは願望することです。願望することは、仏さまの願う方向へ自分の生きる姿勢が向くということ」（『一生感動一生青春』）

もうひとつ、相田みつを氏の「正月の正の字」と題した文章の一節を。

正

「皆さん、正月の〈正〉という字ね、字引きで引くとすると「何へん」で引くと思いませんか？ やさしい字だから改まって引いたことがないかな？ 昔の漢和辞典ではね、「止」というへんで引くんですよ。〈正〉というのはね、「一に止まる」ということです。「一を守る」それが正。それでは一とは何でしょう？ いままで、何回も書いてきましたが、一とは原点、一とは自分、一とはこのわたしです。自分が人間としての原点に止まる、それが正。自分が人間としての原点を守る、それが正。自分が自分の原点に立ち帰る、それが正です。そして、自分が自分の原点に立ち帰る月、それが正月です。つまり、自分が自分になる月、それが正月。自分が自分になるということは、人間としての、本来の自分になること。それでは本来の自分とは何か？ いままで何回も書いてきましたが「そんとく」「勝ち負け」お金の「有る無し」等という比べることをやめた自分、それが本来の自分です。初めに述べた子供のことで言うならば柿の落葉を見て「わア、キレイ！」と感動し、その落葉を大事に拾ってきた子供の心、それが子供本来の心です。感動することに金は一銭もかかりません。感動にそんとくはありません。そんとくを離れた人間本来の自分に立ち帰る月、それが正月です。

ふだんの私達の現実生活は、いつも「そんとく」「勝ち負け」という「比べっこ」にふり廻されているか

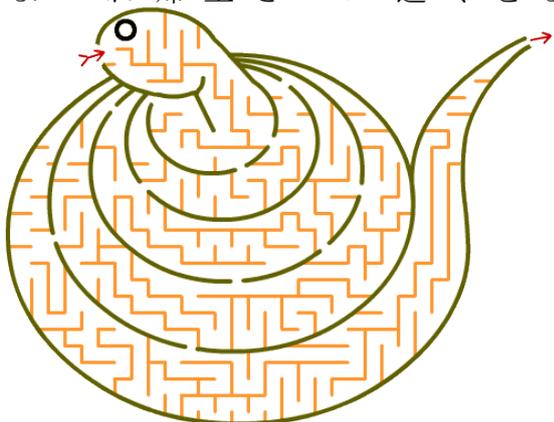


ら、一年に一ぺん、そういう世間的な「比べっこ」をやめて本来の自分に帰ろうというのが正月です。

正月になると、寺によつては、「修正会」（しゅしょうえ）という行事をします。「修正する会」と書きます。何をどう修正するのでしょうか？ 昨年やってきたことのあやまち、失敗を反省し、同じことをくり返さないように、自分の原点に立ち帰って、自分の生き方の軌道修正をするんですね。そして、自分のことばかりではなくて、世の中の平安や世界の人々の幸せを祈願するわけです。つまり、正月とは「そんとく」で歪められた自分の軌道修正をする月ともいえます」（『一生感動一生青春』）

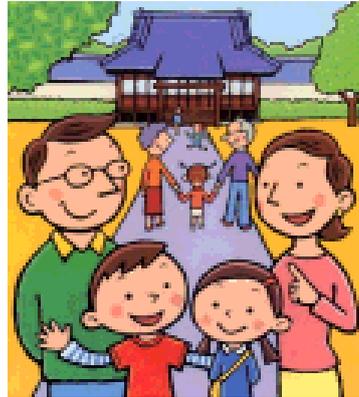
皆さんは迷路で遊んだことはありませんか。迷路は、複雑に入り組んだ道を抜けて、目的地、ゴールまで辿り着くことを目指すゲームです。間違った道に入ったならばいくら進んでもゴールにたどり着くことはなく、一度間違った分岐点、原点に帰って再び進み直さなければなりません。四苦八苦の人生に迷い悩む時、親鸞聖人のみ教えに帰ることによって安穩の道が見い出されてゆくの浄土真宗です。

浄土真宗においても修正会を勤めますが、正月も日常も手を合わず心に変



わりはありません。とはいえ年が替わるのをきつかけとしていきたいものですが、正月にあたって方々にお参りしなければ満足できない、特別に何かをしなければ安心できない、というならば迷っているのかもしれない。真宗は念仏一つでよい、というところ「金剛心」をいただいで進んでいける道です。「そのまま」の救いとは、私は何もしなくてもいいと怠けるのではなく、「願」をいただいで、いのちのありつたけを生き抜くことができる、そういう救いです。

今年は正月七〜九日の三日間、東讃教区仏教婦人会員四百四十名程が新年の初参りとして当山を参拝される、有難いご縁をいただきます。また、報恩講は一月十日に勤まります。「願」を、「金剛心」をいただくべくお参りくださいませ。



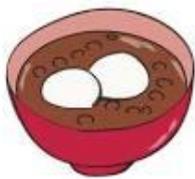
仏教が生んだ日本語④ 「善哉」(ぜんざい)

砂糖をたっぷり入れて煮込んだ小豆の甘い汁にお餅を入れた「善哉」は、甘党にとってはこたえられません。私も好きです。善哉というと現代では、ほとんどの人がこれを想像するでしょう。しかしもとは、お釈迦様が真理にかなっていることを讃える時に、「善きかな」とおっしゃった言葉として、経典によく出てきます。

この「善哉」という言葉で第一に思われることは、親鸞聖人が一番大切にされた経典である『無量寿経』の教えが、この言葉から説かれることです。未だ欲を離れることができない弟子の阿難がある日、今日のお釈迦様はこの上なく輝いておられますが、こ

のような尊い姿を見たことがありません。真如(理)から来て下さった如来として私たちを導く徳を備えておいでになるに違いありません、そうでなければ、なぜこのように輝いておいでになるのでしょうか、と驚いて問います。お釈迦様は、阿難が、苦悩する一切の人々の深い悲しみを代表して、それを救う如来と仰いだことを喜ばれ、「善き哉、阿難。問いたてまつるところ甚だ快し」と、その問いを讃えます。そして今日こそ、お釈迦様が如来としてこの世に出られた本当の意義を説く時が熟したと悦ばれ、その如来の究極の目的が、一切の人々を救う阿弥陀如来の本願と南無阿弥陀仏の名号を説くことであつたと、明らかにされるのです。阿難尊者のこの問いによって、お釈迦様の仏教が念仏として世界中の苦悩する人々を救う道となり、だからこそ同時にまた仏教があらゆる人々にとつて真理ともなつたのです。その大切な仕事を果たした阿難尊者を、お釈迦様は「善哉」と讃えたのです。

あの甘い「ぜんざい」を食べたお坊さんが、あまりの美味しさに驚いて、思わず「善哉」と叫んだところから、お釈迦様のこの意味深い言葉が、甘党にはこたえられない食べ物の名前となつたのだそうです。讃岐のお正月には「あん餅雑煮」が多いと聞きます。賛否両論ありますが、これは「雑煮」でもあり「善哉」でもあり、両方の美味しさを同時に味わうことができる稀有なものと言えるでしょう。(参考『仏教が生んだ日本語』大谷大学編)



+

